研究の現場から

「電子処方せんネットワーク」を開発

徳島文理大香川薬学部　飯原なおみ准教授

徳島文理大香川薬学部の飯原なおみ准教授(49)は、香川大医学部や香川県立保健医療大と連携して、「電子処方せんネットワークシステム」を開発した。今秋から、同医学部附属病院と県内数十カ所の調剤薬局で実証実験を始める。

電子カルテの普及などで、病院薬剤師は医師や看護師と同じ情報を得られるようになり、チーム医療での役割が大きくなった。一方、薬局薬剤師は、紙ベースの院外処方せんで調剤し、病名さえ知らされない。薬剤師が把握した患者の副作用や調剤薬局で切り替わったジェネリック医薬品名などを、医師に確実にフィードバックする仕組みもなかった。

同システムは「かがわ遠隔医療ネットワーク」(K―MIX)を利用。病院と調剤薬局をネットワークで結び、処方せんなどの情報を電子的に相互にやり取りする。

紙の処方せんと違い、病名や検査データ、患者のアレルギー歴なども送信され、より多くの情報をもとに、調剤薬局で患者の状態に合った薬かの確認や、より細かな服薬のアドバイスが可能になった。更に、薬剤師側からも、薬の変更や副作用などの情報が医師に届くため、医師もよりきめ細かい診療ができるという。これまで以上に副作用の情報も集められ、医薬品の安全性評価の精度が高まる。

今後の課題として、飯原准教授は、多くの医療機関の参加や、調剤報酬明細書を作るレセプトコンピューターとのシステム連携などを挙げ「患者、医師、薬剤師それぞれがシステム利用による医療の質向上を理解することが普及につながる」と語る。　【吉田卓矢】

電子処方せんネットワークシステムの画面について説明する飯原なおみ准教授

ウェブや求人広告

高松「しこく編集学校」

企業や地域がその魅力を再認識し、発信する力をつけるため、四国経済産業局が「しこく編集学校」を高松市内で開講した。中小企業などから約90人が参加し、企業ウェブサイト原動力として一シビックプライド（住民や働く人の都市への誇りや自負）」が提唱されており、それを根づかせ、四国ならではの産業や街づくりを支援するのが目的という。

この日のテーマは「小さな会社・小さなまちがその魅力を伝えるには、どうしたらいいだろう」。講師を務めたウェブプロデューサーのトム・ビンセン仕事の長い点も悪い点も伝え、意思のある人を採用してほしい」と話した。

講座は計5回を予定。住民参加のまちづくりや、科学・技術の分かりやすい伝え方、地域出版のあり方などのテーマごとに、受講者を募集している。問い合わせは四国経産局（087・811・8505）。

【馬渕晶子】

結婚を考えたら　サンマリエ
20代・40代・50代・60代のプランもございます。
30歳からの出会い
いい出会い・い
資料請求・24時間受付中